

『源氏物語』の歌ことば引用・光源氏と空蟬の和歌贈答場面から

鈴木裕子

はじめに

古典の物語や日記などを読んでみると、会話の延長のように和歌が詠み交わされる場面で、詠まれた和歌が古歌を下敷きにしていることや、和歌に言い添えられた言葉に古歌の一部が引用されていることがある。引用されている古歌を、それと特定するのは、現代の読者にはなかなか難しいことであろう。和歌をコミュニケーション・ツールとしていた平安・鎌倉期の貴族たちにとってはどうだったのだろうか。当時の人々にとっても、特に古歌の断片を言いかけられた場合に、もとの歌一首を（正解）として限定するのは、そうたやすいことばかりではなかったのではなからうか。コミュニケーションの方法としての古歌の引用^{〔1〕}について、今回は、『源氏物語』の光源氏と空蟬の和歌贈答の場면을例にして、常々考えていることの一端を記してみたい。

一 光源氏から空蟬へ・「寝る夜なければ」

まず、和歌に言い添えられた言葉に引用されている古歌の特定が、それほど難しくない場合を挙げよう。

「雨夜の品定め」の後、光源氏は、方違えにかこつけて、左大臣邸から紀伊守の中川の邸へと移った。そして、折しも滞在していた、紀伊守の父・伊予介の後妻である空蟬と契りを結んだ。空蟬に心惹かれた源氏は、空蟬の弟・小君を召しかかえ、文使いとして、空蟬に文を届けさせたのであった。

御文を持って来たれば、女、あさましきに涙も出で来ぬ。この子の思ふらむこともはしたなくて、さすがに御文を面隠しに広げたり。いと多くて、

「見し夢をあふ夜ありやと嘆く間に目さへ合はでどころも経にける
寝る夜なければ」

など、目も及ばぬ御書きさまも、霧り塞がりて、心得ぬ宿世うち添へりける身を思ひ続けて臥し給へり。

(帚木・七二頁^②)

源氏の文に添えられた傍線部「寝る夜なければ」が古歌の引用である。

「寝る夜」がないという意味の表現を詠んだ歌は、現在見ることができる限りでも、『源氏物語』以前、もしくは同時代のものとして、多数の用例がある。その中から歌句「寝る夜なければ」「寝る夜はなくて」に限定すると、次のような歌が挙げられよう。

a 夢にだに見ることぞなき年を経て心のどかに寝る夜なければ (恋一・五三八・後撰集^③・詠人不知)

b 恋しきを何につけてか慰めむ夢だに見えず寝る夜なければ

(拾遺集・恋二・七三五・源順／天徳四年内裏歌合・大中臣能宣)

c 敷栲の枕をまきて妹と我と寝る夜はなくて年ぞ経にける

(古今六帖・としへていふ・二五五四／万葉集・二六一五)

a 歌は、「私は夢ですらあなたと逢えない。あなたに思いを寄せたまま年を経て、心穏やかに寝る夜がないので」と、現実でも夢でも逢えない相手への恋しさを詠ったものである。空蟬に贈る言葉としては、「年を経て」の部分が、状況にそぐわない。c 歌も、恋人と共寝ができずに年が過ぎたことを嘆く歌で、「年ぞ経にける」の部分が合致しない。場合によっては、「年」を「頃」に言い換えて引き歌とすることもあろうが、他に相応しい古歌があれば、わざわざそのような細工を考える必要はない。a 歌と c 歌は、引き歌のことを考える場合には、もとの歌の候補から除いてよいと思われる。

残る b 歌は、じつは、『源氏釈』『奥入』『紫明抄』その他の古注釈書が指摘している歌である。表現が少し異なった形で、『細流抄』『孟津抄』『紹巴抄』『岷江入楚』『湖月抄』なども引いている。ただし、『源注余滴』は、b 歌の他に、c 歌と「夢の内にあひ見むことを頼みつつ暮らせる宵は寝む方もなし」(古今集・恋一・五二五・詠人不知)をも挙げている。⁴⁾これは、現実には逢えないから、せめて夢の中で逢いたいと思うのに、寝る方法がない、眠れないという歌であるが、源氏の言葉「寝る夜なければ」にそのまま符号する表現を持つ古歌が他にある以上、引用としては考慮しなくてよいと判断される。

以上のことから、この場合は、b 歌(あなた恋しさのあまり煩悶して、夜も眠れない私は、どうすればよいのでしよう。寝られないので、あなたと夢にでも逢えないのです)の第四句を引用したのだと特定できよう。

源氏は、空蟬に、「いと多くて」とあるように、たくさんの言葉を費やして恋心を訴えた後に歌を書き記し、さらに続けて古歌のことばを引用するという念の入った文をしたためたのである。この文の意味は、次のようになろう——先夜のアナタとの逢瀬の夢が本当になって、あなたと逢う夜があるのだろうか、と嘆いている間に、逢えないどころか、目さえ合わずに、眠れない日々が経ってしまいました。眠れないので夢を見ることもできず、あなたを恋しく思う心を慰めようがありません。

源氏は、歌の内容を古歌のことばを引用することで補強したのであるが、「あなたを思うあまり眠れぬまま時が

過ぎるのを嘆いている」という内容の歌に、「眠れないからあなたを夢に見て慰めることもできない」という趣旨のことばをつなげたわけで、逢いがたい相手に恋心を訴えるのに、じつにわかりやすいメッセージを送ったことになる。この場合は、空蟬が、万が一b歌の引用がわからなくても、源氏の伝えたいメッセージは伝わるだろう。

ただ、古歌の言葉をつけ加えることは、単に歌意を補強するだけではない効果があるろう。古歌などを引用したメッセージを送ることは、送り手と受け手との間に、共有できる教養の基盤があることが前提となっている。受け手は、送り手が自分の教養のほどを認めているからこのような表現を用いたのだと知ることにもなるろう。和歌贈答の（社交）的なありようが窺えると思う。身のほどをわきまえ、二度と源氏に逢うまいと心を決めている空蟬であっても、老いた受領の伊予の介相手では望むべくもない、洗練された（社交術）に則った文を受け取って、心が騒がないはずもない。源氏との関わりを「夢」と定め、日常に生きることを選ぶ空蟬だが、「心得ぬ宿世うち添へりける身を思ひ続けて」臥すばかりということになる。この文は、源氏が、空蟬の心を和らげ、なびかせたい一心で、言葉を尽くしてしたためた戦略的な文なのだといえよう。

ともあれ、この「寝る夜なければ」は、わかりやすい古歌のことばの引用によってメッセージを補強した例といえるのではないかと思う。では、次の場合はどうだろうか。今度は、源氏との逢瀬を拒み通して日数の経た頃、空蟬から源氏への贈歌の場合である。

二 空蟬から光源氏へ・「益田は、まことになむ」

夕顔巻、何がしの院で急死した夕顔の野辺送りは、惟光の手配によって、速やかに密かに行われた。源氏は、最後まで見守って二条院に戻った直後から、重い病の床に就いてしまった。ようやく病が癒えたという頃に、光源氏は、珍しいことに空蟬からの消息を受け取った。次に掲げるのが、その場面である。

かの伊子の家の小君参る折あれど、ことに、ありしやうなる言伝てもし給はねば、憂しと思し果てにけるを、いとほしと思ふに、かくわづらひ給ふを聞きて、さすがにうち嘆きけり。遠く下りなどするを、さすがに心細ければ、思し忘れぬるかと試みに、

「承り悩むを、言に出でては、えこそ、

訪はぬをもなどかと問はでほどふるにいかばかりかは思ひ乱るる

益田は、まことになむ」

と聞こえたり。めづらしきに、これもあはれ忘れ給はず、

「生ける効なきや。誰が言はまし言にか。

空蟬の世は憂きものと知りにしをまた言の葉に懸かる命よ

はかなしや」

と、御手もうちわななかるるに、乱れ書き給へる、いとどうつくしげなり。なほかの蛻けを忘れ給はぬを、いとほしうもをかしうも思ひけり。かやうに憎からずは聞こえ交はせど、気近くとは思ひ寄らず、さすがに言ふ効なからずは見え奉りてやみなむと思ふなりけり。
(夕顔・一四二頁)

ここで、問題にしたいのは、空蟬の消息の最後に付け加えられた傍線部「益田は、まことになむ」の一言が、二人のやりとりにおいて、どのような機能を果たしているのか、ということである。

まず、歌ことばから確認しておこう。「益田」は、通常「益田の池」として歌に詠まれている。大和国の歌枕で、「ます」に「増す」が掛けられたり、池から採れる蓴もろこ(ジュンサイ)を詠み込んで、蓴は手繰って採ることから「繰る」を縁語として、「来る」を掛けたり、「苦し」を掛けたりすることもある。

次に、『源氏物語』と同時代以前のものと思われる歌を五首挙げてみよう。

a 根草のくるしかるらむ人よりも我ぞますだのいけるかひなき (拾遺集・恋四・八九四・詠人不知)

b 恋をのみますだの池ぬ浮き蕁くるにぞもの乱れとはなる (古今六帖・池・一六六八)

c 恋をのみますだの池の根草のくればぞもの乱れともなる (古今六帖・ねぬなは・三八三二)

d 見るからに思ひますだの池に生ふるあざさの浮きて世をば経よとや (古今六帖・あざさ・三八三二)

e 思ひのみますだの池の根草のくるしやかかる恋の乱れよ (能宣集・大中臣能宣)

その他、物語としては、『落窪物語』に、道頼少将から落窪の女君への贈歌として、「かき絶えてやみやしなましつらさのみいとどます田の池の水茎」と詠われている。恋しい女君が返事をくれないので、つらい思いばかりがますますつのる、と言って少将が顧みを訴える歌である。

こんなふうには、歌語「益田(の池)」は、恋心や物思いを増すという意味の名を負う益田の池、その池に生う蕁を手繰って採るように物思いを手繰り寄せるというイメージを引き出すものとして機能しているといえよう。

この場面では、空蟬の文(あなた様がお病気との噂をうがかって、私も苦しんでいることを、口に出してはともいけません。そういう状態でおりますのに、あなた様の方では、私が御見舞しないのをなぜかと問うて下さることもなくて月日が経ちます。そのことをどれほど思い乱れておりますことか)を受け取った源氏が、波線部「生ける効なきや」と返答をしたことで、すぐに読者は、a歌とつながって読み取ることになる。つまり、源氏は「益田は、まことになむ」という空蟬のことばに対して、あなたの言いたいことはわかりますよ、あの「いけるかひなき」の歌のような気持だということです、と了解したことをメッセージとして送ったことになる。

古注釈書の『源氏釈』『奥入』『紫明抄』『河海抄』『細流抄』『韶巴抄』『岷江入楚』『湖月抄』その他、現代の注釈書に至るまで、このa歌を指摘している。

そうすると、空蟬のメッセージ(「益田」は、本当のことでした)は、諸注釈のとおり、「あの古歌に言う「私こ

そ生きるかいが無い」というのは本当のことでした……病気で苦しんでいらつしやるあなたよりも、私の方がもっと苦しくて、生きるかいがありません」ということになる。

しかしながら、ただ「益田」とだけ言い添えた空蟬の真意を、a 歌を想起することによってのみ解き明かしてよいものだろうか。「益田（の池）」を含む古歌は、現在確認できる限りでも複数首ある。この場合、ほかならぬ源氏がその中から一首を選んで、空蟬が引用した歌だと認定したのである。一首を選ぶということは他を棄てることである。受け手である源氏の意に適う歌が、意識的に選ばれたのだろうか。もしくは、その時の源氏の念頭にはこの一首が必然的なものとして想起されたのだろうか。いずれにせよ、源氏が「生ける効なきや」と言ったことは、源氏が空蟬の投げかけた歌ことばをどうキャッチしたか、ということを表すのであり、必ずしも送り手である空蟬の意図を解き明かすものではないかも知れないのである。

ところで、空蟬がこの消息を源氏に届けたとき、彼女はどのような心境であったのだろうか。

源氏からは、「ありしやうなる言伝て」もなくなり、「憂しと思し果てにける」を、「いとほし」と思う空蟬であった。日常の中で源氏に逢うことは拒んだが、心は源氏に傾いていたことは明らかであった。たまさかの歌のやりとりぐらいは拒んでいなかったのであり、源氏から文を貰うのは、煩わしくもあり嬉しくもあり、という複雑な心情であった。全く消息が途絶えてしまうとすれば、ほっとする反面、寂しくもあろう。源氏が病の床にあると聞けば、途絶えていたのは、そのためだったのか、忘れられてはいなかったのか、とほっとしたのではないか。そういう空蟬の内面は、先に原文を引用したように、「かやうに憎からずは聞こえ交はせど、気近くとは思ひ寄らず、さすがに言ふ効なからずは見え奉りてやみなむと思ふなりけり」と記されている。

さらに、空蟬の身には一大事とも言える、夫に伴われての伊予への下向の時が近づいていた。生まれて初めて都を離れて「人の国」へ行く不安、心細さに襲われていたのであった。都を去る不安と心細さは、「思し忘れぬかと試みに」源氏に歌を贈るといふ、いささか大胆なふるまいに空蟬を駆り立てたのではなからうか。やはり、本心

では、源氏に忘れられたくないのである。もし忘れ去られようとしているならば、薄れつつあるらしい（と空蟬が推し量る）自分との思い出を、手繰り寄せるようにでもして源氏の記憶の中に再生するべく、歌を贈ったのである。空蟬は、夕顔との出来事や、源氏の病の重さなどについて、詳しい情報は何も知らない。よって、空蟬自身の不安と心細い思いが、文には反映されているように思われてならない。そのように空蟬の思いを読み解いて、この贈答場面を解釈するならば、空蟬のことば「益田は、まことになむ」の背景に、ただ一首a歌を限定しなくてもよいのではなからうか。

空蟬は、a歌のみを念頭にして言葉を投げかけたのではないかもしれない。教養ある空蟬にとっては、「益田」と言えば、ますます募る恋心、手繰り寄せる物思いの苦しさといったイメージがあることは承知の上であろう。この一首というように特定な本歌があったわけではなかったのかもしれない、複数の古歌の選択肢があったかもしれない。古歌の断片を投げかけることは、相手がどのように歌ことばを受け止め、どのように返してくるか、じつに緊張をはらむ、挑戦的な言葉に拠る冒険である。「物思いが増すという益田は本当でした」の後に、源氏にどのようなイメージが展開するかは、空蟬にもわからなかったのかもしれない。忘れられたのかと寂しく思い、「こころみに」贈った歌なのだから。

「益田」という歌ことばに対して、和歌によるコミュニケーションに熟練していた平安貴族の読者たちは、どのような歌やイメージを思い浮かべただろう。おそらく、益田が詠まれた歌の候補を何首か思い浮かべたことだろう。その中には、現代の私たちには伝わらない歌もあったかもしれない。思い浮かべた歌から生成されるイメージを味わいながら、空蟬の心情に思いを馳せ、そして、源氏の返答を読み、また、フィードバックして、源氏が読み解いた空蟬のメッセージを辿りつつ空蟬の思いを想像し、反芻する……、そのように行きつ戻りつしながらゆつくりと流れる物語世界の時間を味わうという享受のありようを想定することは不可能だろうか。

例えば、「益田」から、『古今六帖』のb歌「恋をのみますだの池ぬ浮き尊くるにぞものの乱れとはなる」を想起

するならば、「〈恋心が増すという益田の池に生える蓴を手繰ると、苦しさが募る〉」というのは本当でした。……あなたからのお言葉が途絶えて、私は、思い乱れています。恋しさと物思いに苦しむ気持と、ふたつながら味わっているのです」ということになろう。実際、空蟬の歌の下旬は「思ひ乱るる」とあったのだから、その連想で「くるにぞものの乱れとはなる」とつながっていくのは不自然ではない。

あるいは、d歌「見るからに思ひますだの池に生ふるあざさの浮きて世をば経よとや」ならば、「〈物思いが増す、〔益田〕と歌にあるのは本当でした。……お言葉が途絶えたせいで、私は思い乱れているのです。あなたは、お便りも下さらずに、私が思い乱れるままに、定めなくこの世を過ごせというのですか。あの、思いが増すという益田の池のあざさのように」という具合である。

古歌の断片を投げかけることは、相手がどのように歌ことばを受け止め、どのように返してくるか、必ずしも明らかではなく、緊張をともなう冒険的な営であろう。そのことばを贈った人自身も、思いがけない展開となることもある。それこそ、和歌によるコミュニケーションの方法の一つというものであろう。

むろん、古注が指摘し、源氏自身が選り取ったa歌が〈不正解〉だと言おうとしているのではない。ただ、源氏が指定したa歌のみを、空蟬自身が意図した古歌の〈正解〉と限定しなくてはならない、とすることを疑ってみたのである。

三 光源氏から空蟬へ・「空蟬の世」の返歌

最後に、空蟬の贈歌に対する源氏の返歌を確認しておこう。「益田」が詠み込まれたいくつかの歌の中から、源氏が、a歌を必然的なものとして選び、空蟬に歌を返したとするなら、なぜその歌を選んだのか、ということについても考えてみなければなるまい。

源氏の病はきわめて重篤であった。ようやく体は癒えたものの、また夕顔の死は、源氏の心の中に重くわだかまっていた、心の整理はつくはずもない。物思いにふけり、夕顔の鎮魂の時を過ごしていたのであった。そのようなときに、空蟬からの文が届いたのである。「益田」といつても、ますます募る恋心や、自らたぐり寄せる物思いなどというイメージに絡めて、伊予下向を目前にして複雑な空蟬の心境を思いやり、揺れる思いを受け止める余裕はなかったのかもしれない。

源氏の返歌は、「空蟬の世は憂きものと知りにしをまた言の葉に懸かる命よ」というものであった。この歌の下旬からは、

・慰むる言の葉にだに懸からずは今も消ぬべき露の命を

(後撰集・恋六・一〇三二・詠人不知)

・露ばかり頼め置かなむ言の葉にしばしもとまる命ありやと

(古今六帖・ことの葉・三三六七)

のように、類似した発想の歌が想起される。中でも『後撰集』歌の詞書には、女のもとから期待させるような言葉を書いてきたのに対して男が応じた歌であることが記されていて、源氏と空蟬の贈答状況と通うものがある。思いを寄せている女から言葉をかけられて、生きるかいを得られたとする男の思いは、男女の普遍的なありようとして、歌に詠まれ得るものなのだろう。

源氏の文の内容は、「私の方こそ、これまで、生きるかいが無いと思っていました。「空蟬」のようにむなしいなたとの縁を思うとこの世はつらいものだと思いましたが、今は、あなたの言葉にすがって生きたいと思いません。あなたの言葉がなければ 死んでしまったに違いありません、というのもわれながらはかないことです」ということになる。源氏の返事によって、空蟬は、「私の投げかけたメッセージをそのように受け止めたのだな」と知ることになる。そして、その返事は、彼女にとって好ましいものであったことは言うまでもない。

返事を受け取った空蟬は、歌ことば「空蟬」に心をとめた。それは、通常の歌ことばとしては、はかない人生、人の命の短さというイメージを表すものだが、むろん、光源氏と空蟬の関係においては、はかない恋の記憶のシン

ボルとなる。「空蟬」は、彼女が「脱ぎ捨てた薄衣」であり、秘められた源氏との恋の思い出の証なのである。源氏の返歌から、空蟬は、あの衣がまだ源氏の手もとにあり、源氏はまだ私のことを忘れていないのだというメッセージを受け取ったことになろう。空蟬にとつて、光源氏からすっかり忘れ去られることはむなしいことである。源氏の記憶の中から自分が忘れ去られるのは、都世界に確かに生き、高貴な源氏に愛されたという自分の存在そのものが抹殺されるに等しいのである。源氏の記憶に自分との思い出が刻まれているということは、これから「人の国」へ下向する空蟬の心の支えとなろう。

古歌の一部を切り取ってやりとりするというのは、両者に等しくそれなりの教養が必要であるのはむろんだが、どのように受け止められるかは、必ずしも明らかではなく、緊張感をほらむ贈答行為でもあるのだ。誰でもわかるような有名な歌や、間違えようのない引用の仕方ならともかく、この場合のように、ごく短い言葉でのやりとりには、たとえその歌をもらった作中人物が一首に特定していても、読者としては、作中人物である送り手の〈意図〉したであろうもとの歌を特定するために、複数の古歌を想起し、もっともふさわしいものを選ぶというプロセスが必要なのではなからうか。じつは、そのプロセスを確かめる事じたいが、読者にとつても、作中人物の心の動きを追うのに必要なことなのではなかったか、という気がする。

ゆきくに

『源氏物語』を読んでいると、古の読者は、現代の読者とは異なる享受（愉しみ方）をしていたのではないかと思うことがある。特に現代の読者は、和歌贈答場面を読んで、歌がやりとりされるプロセスを味わうことなく、つい注釈書に依存して、そこに引用として定められている古歌によって解釈を固定しがちである。歌ことばや古歌の断片は、まずそのものじたいとして、喚起されるさまざまなイメージの広がりを楽しむべきなのではないのか。和

歌をコミュニケーション・ツールとしていた平安・鎌倉期の貴族の読者たちにとっても、古歌の断片から、もとの歌一首を〈正解〉として限定するのは、そう容易なことではなかったのではないか、と思う。⁽⁶⁾ 現実の世界でも、受け取った側が贈歌のことばを誤解したり、古歌の引用に気づかずについて、メッセージが伝わらなかつたりしたこともあつたはずだ。虚構の物語世界においても、そのような歌ことばの誤解や食い違いによるコミュニケーション不全のようなことが描かれているのではなからうか。あるいは、引用した歌ことばが、もとの歌の〈正解〉を限定しないで相手に投げかけられることもある。相手がどのように返歌するかによって、予想外の方向へとコミュニケーションが展開することもある。

以上のような考え方を基盤にして、『源氏物語』の中から、今回は、光源氏と空蟬の和歌贈答の場面を例にして、コミュニケーションの方法としての古歌の引用について、思うところを記した。視点を同じくして、他にも同様に読み解ける場面があるのではないかと考えている。

注

- (1) 拙稿「六条御息所の歌ことば——「山の井の水もことわりに」考——」（「むらさき」武蔵野書院・二〇一一・一二予定）は、本稿と同じ視点から「研究余滴」として認めた小文であるので、併せてお読みいただけると幸いである。
- (2) 『源氏物語』本文の引用は、新日本古典文学大系『源氏物語二』（岩波書店、初版一九九三）に拠り、私に表記を改めた。
- (3) 和歌の引用は、総て『新編国歌大観』（角川書店）に拠り、私に表記を改めた。
- (4) 『源注余滴』巻の二「帚木」の「ぬるよなければ」の項に以下のようにある。（細）恋しさを何につけてかなくさまん夢にも見えずぬるよなければ」此歌出所しらずたゞしぬる夜なしといへるは万葉集巻の十一に「しきたへの枕をまきていもと我ぬるよはなくて年を経にける」又古今恋一「夢のうちにあひみんことをたのみつつくらせる宵はねんかたもなし」などをおもひていへるにや。

(5) 例えば、現代の『源氏物語』の注釈書では、次のように現代語訳されている。

・『新潮日本古典集成』（新潮社、一九七六年）の頭注……「益田」（私こそ生きているかいはございませぬ）と申すのは、本当のこと（ごんごい）しました。

・『新編古典文学全集』（小学館、一九九四年）の現代語訳……益田の池の、いきているかいもない、とは本当に私のこと（ごんごい）しました。

・『源氏物語の鑑賞と基礎知識』（至文堂、二〇〇〇年）の現代語訳……「益田」の歌の、生きる甲斐もない、というのは真実でした。

(6) 注（4）にあげた『源注余滴』では、「寝る夜なければ」について、『細流抄』の指摘する歌を掲げながらも「出所しらず」と記している。もとの歌をはつきりと限定していかないことは、興味深い。